令和元年度　第１回逗子市共育のまち推進懇話会
会議概要

●日　時　2019 年（令和元年）７月５日（金）　10：00～12：00
●会　場　市役所５階　第２会議室
●出　席　懇話会メンバー　松岡安奈、金山彰風、出居尚樹、長坂寿久（敬称略）
　　アドバイザー　　池谷美衣子（敬称略）
●欠　席　懇話会メンバー　矢部基子、小谷洋一、石渡眞澄（敬称略）
●事務局　市民協働部：石井聡次長
　　市民協働課：中川公嗣係長、北村絵理主事
●傍聴者　なし
●配布資料
　資料１　　逗子市共育のまち推進懇話会メンバー名簿
　資料２　　基幹計画進行管理表
　資料３　　総合計画・基幹計画・個別計画の進行管理について（１～３）

〇開会
　メンバー自己紹介

〇議題
【共に学び、共に育つ、共育のまち推進プランの評価について】
1. 生涯学習活動推進プラン
座　長：個別計画進行管理総括表-1 の②目標に対する評価について、目標４に「市民交流センターの会議室の利用率が 70 パーセントになっている」とあるが、これは市民交流センターに限定するのではなく、コミュニティセンター等ほかの施設も含めるべきではないかと思う。
メンバー：生涯学習活動推進プランを包括的に見たときの意見として、１つは数ある講座の開催に関して、募集人数や応募者数、出席者数、希望テーマの把握など、ある程度評価の物差しの共有化ができないかということ。もう一つはプランの中でも重要だと謳われている現代的課題、地域課題などを活動につなげる企画について、戦略的な課題として見る視点をはっきりしていく必要がある。
講座の開催受講状況を調べてみたが、ずし楽習塾講座、社会教育講座、子ども講座の３つに分けて見てみると、ずし楽習塾講座は１回の講座開催において受講している人数が少ない傾向にある。それから、講座の内容を現代的課題、地域的課題の視点で見てみると、ずし楽習塾講座では従来の生涯学習タイプの講座が多いが、現代的ニーズでは公共公益ボランティア育成や若手育成未来投資型の講座を

充実させていく必要がある。

メンバー：図書館について、確かに立派な活動をしているが、目標設定の仕方に疑問がある。図書館の活動は国際的にも今見直されており、映画化されたり書籍がヒットしたりしている。それほどテーマとして取り扱われるのは、情報構造の変化に対して図書館がこれからどう対応していくかという大きなところがある。図書の貸出を行って人々に来てもらうという従来の活動ではなく、まったく新しい、個人個人や追いやられている人たちも集まり交流する社会的な場としていく、という変化も起きている。図書館の役割の視点というのは、地域社会の中で取り残された人たちにも向けていく必要があるので、その在り方について改めて考え、意見を吸い上げていってほしい。社会の変化が激しい中で、数年間、目標を固定してしまうよりは、状況により協議していく方が好ましいと考える。

座　長：確かに、目標については設定当時、数値目標の方が良いだろうということになったが、その是非については今後の検討課題であると思う。

2. 文化振興基本計画

座　長：アートフェスティバルについて、企画数が増えていることは分かるが、内容についての市民の方々の反応についてはよく分からない。

施設の維持管理についてはＢ評価だが、その他の文化活動については順調に進んでいると思われる。

3. スポーツ推進計画

メンバー：特に高齢者に関して言うと、未病センターとの連携がもっとできれば良いと思う。また、高齢者の仲間づくりにもつながっていくようなプログラムが好ましい。

石井聡次長：どうしても個々が集まってもなかなか次にはつながらないので、仲間づくりという意味では、地域ごとに行われているフレイルチェックやポールウォーキングなどが該当すると思うが、介護予防という色が強いのが実態である。

4. 学校教育総合プラン

メンバー：教育関係の仕組みや役割分担について、どこがどうつながっているのか分かりにくい。例えば、地域から学校に投げかけたいことがあったとしても誰に話して良いのか、どのように機会をつくっていったら良いのか、見えてきにくい現状があると思う。

メンバー：地域の方々とのつながりについては、学校側から依頼するという形であることが多いのが現実である。なかなか開かれた学校というのが厳しい状況ではあるが、地域とのかかわりの入り口としては、校長や教頭が窓口となっている。

また今後、学校を地域と一緒に作っていこうというコミュニティスクールについ

て、文科省から努力目標とされているので、地域の方々との連携の在り方について模索しながら進めていきたい。

石井聡次長：少し違った視点から見てみると、カリキュラムが精一杯の学校の授業の中で先生方が新たなことにチャレンジしていく余裕はなかなかないはずなので、保護者や地域の方などを講師として取り組んでいる例としては、サマースクールというものがある。夏休み中に課外活動として参加したい子どもが参加するというもので、時間の制約もあまりないのでそういうものであれば比較的取り入れていきやすいかと思う。

5. 社会教育推進プラン

メンバー：講座を開催するとアンケートを取るのだが、似た講座ではできるだけ同じアンケートを実施して統計化していく方が良いと考える。また、講座の周知方法は様々あるが、アンケートを見てみると広報ずしで情報を得たという方がほとんどである。掲示板などちらしを見てという人もいるが、「ナニスル」の改善やＱＲコードの積極的な活用など、工夫をしていく必要がある。それから、講座の参加者が次のリーダーになっていくことを望むのであれば、講師との事前の打合せなどで、逗子市はアクションにつながる講座を目指しているので、この後、自分がどのように活動していきたいか考えてみて欲しいということを、講師に言ってもらうよう伝えることも方法であると思う。

アドバイザー総括

アドバイザー：財政的に厳しい状態であるということを昨年度聞き、今年度の事業がどうなってしまうのかという心配がかなりあったが、お金がないとどうしようもない施設のことは進んでいないが、それ以外の事業に関しては計画どおり、あるいはそれ以上の成果が出ているということに驚いた。ピンチをチャンスに変える逗子の市民の底力が現れた１年だったと思う。それはたまたまできたことというよりは、長年の蓄積が成しえたことだと思うので、この共育のまち推進懇話会としてはそれをまず評価、主張したい。

全体としては昨年も感じたが、小規模の市でこれだけの活動がハイレベルでされているという印象。市の評価というのがそぐわないところがあるのは、先に市民の活動が大きく動いているということでもあるので、そこで全て評価されなくても良いのかなと思う部分もある。

先ほどから、社会の変化が激しい中で４年間という計画では対応しきれないという話も出ているが、そうなるとそれぞれの現場で、自分たちは何のために活動しているのか、何を大事にしなければならないのか、ということを、各施設、事業が考えていかなければならないと思う。そこをどう支えていくかということが

課題であるが、個別の懇話会がかなりその機能を持っていると考える。

それから、指定管理に出している施設、事業が多いので、指定管理者だからできることや、専門性に期待したい。他の自治体や海外も含めて新しい事例を把握していくためには、外にアンテナやネットワークを持っていないと取り残されていってしまう。市の職員をはじめ、指定管理者、市民活動されている方がどう外とつながっていけるかというのが、今後の逗子の活動の質を決めていくと思う。

施設の修繕については行政にしかできないことなので、毎年遅れているという状況が大丈夫なのか、何かあってからでは遅いので譲れないラインは設けて欲しい。